
鏡音の休日

昴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡音の休日

【Nコード】

N19790

【作者名】

昴

【あらすじ】

鏡音リンと鏡音レンのある日の休日を書かせていただきました。少しですが鏡音の歌の歌詞を使わせていただいています。

登場人物の紹介？

知らない人がいるかもしれないので念のため簡単な紹介です。

登場人物

鏡音リン…レンの双子の姉で高校一年生。とても明るく元気な性格。賭け事、競い事大好きでレン思い

鏡音レン…リンの双子の弟で同じく高校一年生。冷静沈着な方でリンの保護者的な存在。リン思い

初音ミク…リンレンのお姉さん高校三年生。運転免許を持つてる。姉弟思いで優しく心配性

巡音ルカ…のお姉さんで二十歳位で優しく料理上手。世で言う出来る人

カイト…の四人のお兄さんでとても大人しく優しい。年齢は読んで下さる方のご想像にお任せします

メイコ…のお姉さんで酒好きで人をからかうのが好き、カイトを常に心配している

ポーカー（前書き）

これは次話の前日の出来事です

リンレンのイメージを壊したくないという方

駄文は嫌という方は読まない方がいいかもしれません

別に構わないという方は

どうぞご覧下さい

あとサブタイトルの通りリンとレンがポーカーをするので

ルールがわからないという方がいらっしゃれば のサイトをご参考
にして下さい

多少、ルールは変えてありますが役を知っていれば大体大丈夫か
と思います。

変えたのはスート（トランプのマーク）の強い順があるとややこ
しいので無しにしています。後は用語を使っていないだけだと思
います。

[http://www.nintendo.co.jp/n09/
trump_games/poker/index.html](http://www.nintendo.co.jp/n09/trump_games/poker/index.html)

ボーカー

「……なあリン」

「駄目」

自分の五枚の手札を見たままリンが言う。

「まだ何も言っていないけど？」

「言わなくてもわかる…どうせ自分の負けでいいからでしょ？」

「よくわかりで…」

リンは二枚を交換した。

（これ何時まで続くんだよ。もうかれこれ1時間になるぞ…）

こうなった原因は今から1時間程前の出来事……

明日は俺もリンも部活が休みで久しぶりの日曜

だから俺とリンは一緒に映画でも観に行こうかという話になった。

そこまではよかった。

「リンは何が観たい？」

俺はインターネットで映画情報を見ながらリンに聞いたら

「えっと、バイオハザード？」

「っ！？」

正直、俺はそれだけは勘弁して欲しかった。

理由はこの前、部活の友達とプレイしたバイオハザードのゲームがとてつもなくグロくて気持ち悪かったからだ。

銃で倒すと傷口からまるで寄生虫の様なもの（寄生虫なんだけど）が出てくる。

本当に気持ち悪かった…

それ以来バイオハザードが苦手になってしまった…

「…ん、レンってば！」

「えっ！？…何？」

「何？じゃないよ！何回も聞いたよ？」

レンは何か観たい物あるの？」

「えっ？れ…歴史系かな？」

ヤバイ…声が震えてる（汗）

リンはこんな時かなり感が鋭いから絶対に気付く…

「どうしたの？さっきから…もしかして

レン、バイオハザード苦手？」

「そ、そうじゃないけど！今度のテストに出される話だから…

それに映画なら覚え易いし…」

「ふうん、苦手なんだ？」

「だからそうじゃないって…！！」

「じゃあ何でそんなに必死なの？」

そんなに顔に出ていただろうか？

俺が何も言わないでいると

「じゃあゲームで決めよ？」

手を合わせながらリンが言ってきた。

「え？」

「今からゲームをして私が勝ったらバイオハザード

レンが勝ったら他のを観る…これでどう？」

俺は少し考えてからその話に乗ることにした。

「…わかった、いいよ。で？何をするの？」

待ってました。と言わんばかりにポケットから青いトランプを出して

「ポーカークイーン？先に二点を差付けた方が勝ちで！」

と言ってきた。（何時の間にトランプ持ってきたんだ）

それから俺とリンの長い賭けが始まった…

それからどちらも勝っては負けて勝っては負けての繰り返し…そして現在に至る。

もうこの勝負が何回目なのかすらわからない…

今思えばあの時、素直に諦めてバイオハザードに決定していればよかった…

俺はため息を吐きながら自分の手札のカード三枚を交換する。

俺の手札は、まあ悪くはない

リンは…微妙みたいだな

何故かわからないがリンは勝つ時は勝つ、負ける時は負けるで
中間が存在しない…それにリンのリボンを見ると少しは良いか悪い
かがわかる。

気のせいだと思うけど良い時はピヨピヨ跳ねているように見えて
悪い時はシュンと垂れているように見える。

一体、あのリボンは何で作られているのだろうか。

「俺は勝負するけど…リンは？降りる？」

「勝負する」

結果は俺が7と9のツウ・ペアでリンが4と5のツウ・ペア

「俺の勝ちだな」

リンは何も言わずトランプをキリ始める。

「リン、俺が諦めるの嫌なら今、俺もリンも同点だから

次のゲームで最後にしない？次に勝った方が勝ちで…」

リンはトランプを配り終えてから頷いた。

俺の手札は…キングのスリーカードにクイーンのワン・ペアのフル
ハウス

（最後にこんな役しかも最初から出来てる…嬉しいけど

こんな時に運を全部使ってないだろうなあ？）

チラッとリンを見てみると珍しくそこそこの役に近いようだ…

リボンが普通だし…でもどう出るかな？

「私からだよね…」

そう言っ一枚を交換した。

「レンは？どうするの？」

リンのリボンが若干跳ねた様に見えた。

（この役に勝てるのはキングとクイーン以外のフォア・カード以上の
役だけだし…賭けてみるかな？リンも良い役が出来た様だけど）

「俺はいいよ。リンは？」

「私も今いいから勝負する。」

「わかった。」

互いの手札は同じフルハウスでも

リンのカードはジャックのスリーカードに10のワン・ペア

「俺の勝ちだね？」

「そうみたいだね。あゝあ、最後はもらったと思ったのになあ」

リンは残念そうにしかし笑いながら言った。

ポーカー（後書き）

読んでいただいております。

さて：小説ではよく『大富豪』などが一般的みたいですね

わかって何故ポーカーにしたかと言うと：単なる趣味というか

個人的に大富豪よりポーカーの方が好きだからなんですよね：すいません

ポーカーはご理解いただけましたか？

同じフルハウスでも数字がレンの方が強いのでこの話ではレンの勝ちになります

初めはレンがわざと負けさせてリンが勝つ、という流れもあったんですけど

個人的にはこっちが好きかなあ、という理由でこうなりました。

次話を読んでいただければわかるかと思います。

後レンをバイオハザード嫌いにしたゲームですが題名はわかりませんが

似たような物が存在します。（ゾンビを倒すと傷口から寄生虫が出てくるって言う所）友達がした事があるそうで使わせていただきました。

私はホラーやゾンビ等は嫌いですけどね？

映画（前書き）

次話です。

：相変わらず私は題名付けたり考えるの下手ですね
えつと今回と次話はリン視点です

ここはある歌の歌詞を若干変えてセリフとかに使わせていただいています。

鏡音が好きな方なら一度は聴いた事があるかと思います。

そんなことも考えながら楽しんで読んでいただければ光栄です（＾

ｖ＾）

ではよろしく願いします！

映画

「…遅い…遅すぎる。約束の時間もう過ぎたのに
レンが昨日ここに集合とか言ってたくせに」

（まあ…私は何時も待ち合わせの時間より早く着きすぎてしまっ
ど…）

私がこうなっている理由は昨夜のレンとの勝負の後の出来事…

「俺の勝ちみたいだね？」

そうレンに言われて、レンの役を見ると残念だったけど笑いしか出
なかった。

「そうみたいだね。あゝあ、最後はもらったと思ったのになあ」

まあ…レンと勝負する時だけは自分でも運があるかわからな
いからね

「で？レンは明日の映画…何が観たいの？」

「ん…その事だけど明日までに決めていい？」

「えっ？別にいいけど…」

「じゃあ明日1時に公園の噴水の前に集合な？」

「何で？家から一緒に行けばいいじゃない？」

レンの考えてる事が読めなかった…

何時も一緒に出掛ける時は最初から一緒に目的地に行っていたから…

「ちよつと俺はリンより先に出て券を買いに行ったり色々してくる
から」

「そう…わかった。1時に公園の噴水だよな？」

「じゃあ、もう遅いからお休み…」

「うん…お休み」

今朝、私が起きた時には既にレンの姿は部屋にはなかった。

「おはよう…あれ？レンは??？」

てつきりリビングにいるだろうと思っていたのにレンはいなかった
コーヒーを飲んでいたメイコ姉とルカちゃんに聴いてみると

「レン？今日はまだ見てないけど…部屋にいないの??」

メイコ姉は若干まだ眠たそうに言ってきた

「メイコさんが起きてきたのは先ほどでしたからね…」

レン君なら6時位にミクちゃんとカイトさんと一緒に出掛けて行き
ましたよ？

リンちゃんが生きてきたら昨日言った通り公園の噴水に待ってる、
そうレン君が言っておいて欲しいと」

そうルカちゃんが教えてくれた

「ミク姉とカイト兄も？何でそんなに早くに出掛けたの??」

「カイトさんは仕事でミクちゃんはあの付き添いです」

「ミク姉が付き添い？どういう事??」

「車で行きましたから途中や帰りにカイトさんに何かあれば
車の運転を代われるようにと道案内だそうです」

そう教えてくれてルカちゃんは台所に向かった

「成程：カイト兄は方向音痴だもんね」

そう言いながらチラッと時計を確かめる

(今8時だけど…)

ちよつと、どころか：家を出たのだいぶ早いじゃない

カイト兄とミク姉はわかる…でもレンは？

そんなに早くから一体、何をしにいったんだろ？)

「何？今日はレンと久しぶりに出掛ける予定だったの？」

「うん、映画でも観に行こうって…」

ところで何でメイコ姉そんなにニヤニヤしてるの？」

正直に言って不気味で怖い…嫌な予感がする

「別に？ラブラブだなあ～と思って」

「なっ…何言ってるの?!レンは弟だよ!？」

「でもレンの事は好きなんですよ？」

うつ……この姉は何時も何時も

「メイコさん…人の事が言えますか？」

リンちゃん、どうぞ？」

ルカちゃんは私にサンドイッチとミルクティーを出してくれた

「あ…ありがとう、ルカちゃん」

「いえ、どういたしまして」

本当にルカちゃんはお茶を淹れるのが上手だ…

ルカちゃんの淹れてくれるお茶を飲む度に思う

「何？ルカ…何が言いたいのか？」

「言っていていいんですか？」

「別にいいわよ…思い当たる事もないし」

そう言つてメイコ姉はコーヒーに口を付けた

「では失礼します。メイコさんもカイトさんの事が好きなのでは？」

「げほっ！！ルカ！な、何を？！」

メイコ姉にはかなり予想外だったのだろう

ルカちゃんに言われて飲んでいたコーヒーがどうやら気管に入った

ようだ

「そうではありませんか？何時もカイトさんの事を心配しているの

ですから」

どうやらルカちゃんの方が有利なようだ…

確かにメイコ姉はカイト兄には過保護だ

そんな二人のやり取りを見ながら軽い朝食を取った

二人のやり取りを見始めて約1時間

「だから！姉として弟や妹を心配するのは当たり前でしょ？！」

「カイトさんが心配な時だけメイコさん余裕が見えませんか？」

「じゃあ今も余裕がないように見えるの？！」

「今日はしっかり者のミクちゃんが一緒だから

まあ、今日はミクが一緒だから大丈夫か。

そう思っているから落ち着いているのではありませんか？」

「うつ……」

どうやらメイコ姉は凶星らしい

これはルカちゃんの完全勝利で終わりそうだし……

「ごちそうさま

私もレンもお昼はいらないから

じゃあ12時半位に出掛けてくるね？」

「わかりました。楽しんで来て下さいね？」

「あつ！リン！ちよつと待ちなさい！？」

「メイコさん？何か私が今まで言った事に間違いや矛盾、反論がありますか？」

「うつ……もう私の負けでいいから勘弁して、ルカ！！！！！」

メイコ姉は顔を少し赤くしながら降参した

やっぱり、ルカちゃんの勝ちだ

リビングのドアを閉めると思わず廊下で笑いが零れる

レンの考えに疑問は持ったけど

私は準備をして予定より早く家を出た。

そして現在に至る……

（レンが来るのが時間通りじゃないのは分かってるのに……

レンのバカ……ハア）

「……………ン！！！！」

「あ………やっと来た」

遠くからレンが息を切らしながら走ってきた

「ハアハア………待たせてすまん！」

レンは私の近くに来るなり息を切らしたまま手を合わせて謝っている
「絶対に許しません、このバカレン……」

レンに背を向けながら言う

（こんな素気ない態度をしたって我慢できずに、にやけちゃうなあ。

本当……レンには敵わない

ちよつと悔しい……）

「うっ……だからごめんって……！」

チラッ、とレンを見ると今朝の事で何だか恥ずかしくて

「もう……いいから映画を観に行こうよ」

そう私は言って先に進む

「ちよっ！リン……！」

少し遅れてレンが追いかけてくる。

レンが追いついて来てから私は

今回、気になっていた事を聞いてみた

「ねえ……何時も一緒に行くのに何で今日は先に行つて券を買いに行つたの？」

「ん？それは……日曜日だから早く行かないと混むし

それに最近は新作映画が多かったからなおさら混むからだけど？」

「ふ……ん……」

レンの返事に少し納得いかなかったけど気にしない事にした。

「そういえばまだ聞いてなかったけど……今日は結局何の映画を観に行くの？」

「ん……それは着いてからの楽しみって事で」

「何それ……？」

「着けばわかるから」

そう言われて首を傾げた

「とりあえず早く行こう？」

レンは微かに笑いを零しながら言った。

映画館に到着してまだ時間があつたから

近くにあるカフェで昼食を食べて

映画館で私とレンは同じオレンジジュースを購入した。

「レン、もう着いたんだからいい加減

何を観るのが教えてくれてもいいんじゃない？」

「まあ確かに着いたしね……いいよ

今日これから観るのはリンが昨日観たがってたバイオハザードだよ」

「…え？でもリンは昨日

バイオハザードが……」

「うん、確かに俺は苦手だよ？」

リンは私が言いたい事を全部言う前に答えた。

「じゃあ、何で？」

私は嬉しいけど……」

「ん？まあリンがいるし大丈夫かなあ、と思ったし

ついでにバイオハザードを克服しようかと思ったからかな？」

「はあ？」

何それ？？？

レン……本当に大丈夫なの？？？

「俺は大丈夫だから」

「私…声に出してた？」

「別に出してないよ？」

ただ、リンがそう思ってるのかな？と思っただけ」

レン、君はエスパーか……

「とりあえずもうすぐ足下が暗くなるから行こう？」

「うん…分かった」

それから約1時間半後

「面白かった〜！

面白かったよね？……レン？？？」

映画を観終え廊下に出てレンに話しかけても返事がないし

隣を見てもレンの姿がなかったから

私は後ろを振り返って見ると……

「……………」

レンは壁に手を当てて座った状態で死んでいた

何処かでチーンと効果音が何かか聞こえた気がする

「ちよっ！！！レン！？」

えっ？何？観てる時は大丈夫そうだったじゃない！？」

「ああ…ラストの手前辺りまでは……」

そういえば……最後の方で

（へえ…こんなラストなんだあ

……あれ？何か服が引つかかっている？）

って思った気がする…

でも部屋が明るくなった時にはなくなってたからわからなかったけど
もしかして……レンが？

「とりあえず、レン！

何処かで休む？」

「ん…ちよつとこのままでいさせて
もう少ししたら立ち直ると思うから……」

「わかった」

（そんなにラスト怖かったかなあ…？

確かラスボスが斬られた後

大量の寄生虫みたいな物が、うじゃうじゃしてはいたけど…）
そんな事を色々考えているとレンが少し顔が蒼い気がするけど

「リン、もう大丈夫だから…

少し付き合ってくれる？」

と言ってきた。

「いいけど…何処に行くの？」

「それはまだ秘密…

とりあえず駅に行こう？」

「え？電車で行くの？」

私の反応を見てレンは

「そう、じゃあ行こうか？」
そう笑いながら答えた。

映画（後書き）

はい、初めの設定ではメイコさんとルカさんは登場しない予定でしたが

今朝の出来事で登場していただきました！

個人的にメイコさんのイメージはカイメイしかないんですよ…だから余り好んで出したりしません。

ルカさんはよく料理や家事が苦手とかで書いてる人が多いので料理や家事が得意な設定で書かせていただきました。

あと前書きで言った通り鏡音の曲の歌詞を使っていますがわかりましたか？わかった方はその曲のイメージを潰していたらすいません！！

まだ続きます。よろしければ次話もご覧下さい。

花火（前書き）

次話です

初めはリン視点で途中からレン視点に変わります

念のため線を引いています。

これにも鏡音の歌詞を一部だけ使っています。

それでは、よろしくお願いします！

花火

「ねえ…今度は何処に行くつもり？」

電車に揺られながら隣に座るレンに聴いてみる

「ん？いや…ただ花火でも見に行こうかと思ってるね」

「え？今日…何処かで花火大会があった？？」

学校でもそんな話はなかったはずだけど…

「また着けばわかるから…」

それに他にも楽しみがあるし」

そうレンは微笑みながら言っていた

「にしても…眠い」

少し欠伸をしながら言う

そういえば…何時もより遅めに起きたけどその時は既にレンはいなかった

一体、何時起きたのだろう？

「レン、今朝は何時に起きたの？」

「ふえ？えつと…5時頃だったかな？」

そりゃ、昨夜は寝るのが遅かったのにそんなに早く起きたら眠いよね…

「ごめん、リン…後30分で着くから

25分後に起こしてくれる？」

「えっ？あ…うん、わかった」

そう答えたらレンは眠ってしまった…

何処に行くつもりなんだろ？

でも…レンも着けばわかるって言ってたから考えるだけ無駄かな？

そう思いながらレンの顔を覗いてみる

レンは微かに寝息を立てていた

（そういえば…レンがこういう場所で寝てるのって珍しいなあ
学校でも見た事がないし…）

色々考えたりレンを覗いてみたりしていると
気付けば25分を2、3分過ぎていた…

あ…レンを起こすの忘れてた！

「レン…レンってば！

もうすぐ着くよ！？」

レンの方を揺すりながら声をかけてみる

「……………ん？

もう着いた？」

目を擦りながらレンが聞いてくる

「だからもうすぐ着くってば！」

やれやれ、そう思いながら答える

電車が到着して改札を過ぎて外に出ると

時刻は既に6時を過ぎていた

「リン、もうわかったよね？

「そりゃ、見えてるしね」

レンが行こうと行った場所、それは遊園地だった。

「レンが朝早くに出て行った理由がよくわかった」

「そっか…結構、大変だったんだよ？予想以上に映画もこっちも混
んでて

約束の時間には遅れるし…」

（最初から言えばよかったのに…）

「内緒にしておかないと面白くないだろ？」

「今度は声に出してた？」

「今回も出してないよ？」

レン…君は本当はエスパーじゃないの？

レンが朝早くから購入していたチケットで中に入った

「でも…何で遊園地に？」

「ん？言っただろ？花火が見たかったからって…」

「言ってたけど何で急に？」

「今年はリンと花火をまだ見てなかったから」

「そういえば…今年は部活や試合とかがあってレンと花火大会に行けなかったっけ…」

「とりあえず、パレードや花火にはまだ時間あるから何か食べる？」

「そうだね…何食べる？」

「レンが食べたい物でいいよ？」

「バイオハザード観せてもらったから」

「じゃあ…あれ」

「何？ポップコーン??」

「そうじゃなくてその隣のクレープ」

「……レンの気持ちよくわからないね？」

「そう言って二人でクレープを買った。」

二人でベンチに座ってクレープを食べていると

「レン！まだ時間あるからゴーカートのレース出てくるけどレンも一緒に出る？」

「このゴーカートはただ走るだけでなくレースが出来る」

「リンは昔から賭け事や競い事が好きなようだった」

「いや…俺は応援してるよ」

俺の答えにリンは少し残念そうに

「そう？じゃあ行ってくるから応援しててよ？」

「ああ、わかってるよ。頑張れよ、リン」

「そう言ったらリンは笑顔でゴーカート乗り場まで行った」

「俺が参加しなかった理由…」

「それは、リンは自転車やゴーカート等の乗り物の運転がえげつない…昔、一緒に乗って死ぬかと思ったからだ」

まあ…俺もリンと同じような運転は出来ると言えば出来るけど滅多にしない

（リンは…あれか）

俺はゴーカート乗り場の上にある

小さな観客席のような場所からリンを見ていた

やっぱり…簡単にドリフトしてるし

リンにどうやってドリフトしているのか一度だけ聞いた事がある

「なあ、リンはどうやってドリフトしてるの？」

「え？何それ？？私は普通に操縦してただけだけど؟؟？」

（普通、無意識に出来るものじゃないんだよ…）

本当に恐ろしい姉だよ…

「あ…もう終わりだな」

そう思っ下下降りと

満面の笑みをしたリンが

俺に駆け寄ってきた

「レン、見てた？」

「うん、見てたよ。おめでとう」

「当たり前じゃん！」

そう言いながらリンは笑っている

「じゃあリン、次は俺の乗りたいの行っていい？」

「うん、いいよ？」

でも時間は大丈夫なの??」

リンは時計に目をやる

「大丈夫、ファストパス持ってるから…」

「そっか、じゃあ大丈夫だね。」

でも何時それ取りに行っただの？」

「俺が今朝、チケット買いに行つた時
じゃあ、行こう?」

「うん、何に乗るの?」

「ん?あれ」

そう言つて俺は一つのアトラクションに指をさす

その瞬間、リンの顔がだんだん蒼くなつていく

「ちよっ!レン、本気!?」

「うん、本気だけど?」

俺が行こうと言つたのは室内のフリーフォール型のアトラクション

そう…リンが唯一、苦手なアトラクションだ

「私、外で待つてていい?」

「何で?」

「っ!知つてて言つてるでしょ!?」

「何を?」

「何を、つて!私がこれ苦手だつて知つてるでしょ!?」

「うん、知つてるよ?」

「じゃあ、どうし…」

「俺も苦手なやつ行つたから」

「!?」

まあ…俺がただ怖がるリンを見てみたいだけけどね

「~~~~!わかった、行けばいいんでしょ!!」

「じゃあ、並ぼうか?」

ファストパスでも少しは待つ

その間、リンは俺の袖を掴んだまま何も言わない

「リン、もうすぐだけど大丈夫?」

「……うん」

「降りたら次は何処に行く?」

「……うん」

話し聞いてないし…

やっぱりこれはやり過ぎたかな?

そう思いつつも順番がきた

リンは座席に座ってシートベルトをした瞬間

俯いて俺の袖を痛くないのかと思うほど強く握りしめている

（やれやれ、まだ動いてすらないのに

さっきの元気はどこにいったんだ…）

「リン、大丈夫だから

目を開けて遠くを見ている方が怖くないよ？」

そう言くとリンは微かに顔を上げたけどまた俯いてしまった。

（仕方ない…上で景色が見えたらもう一度だけ

声をかけてみるか）

「それでは皆さん、行ってらっしゃい！」

そうアトラクションのスタッフの人が言った瞬間

アトラクションは稼働し始める。

「~~~~~！！」

リンはさっきより強く俺の袖を握りしめている

（そこまで怖がらなくても…

でもそろそろ外が見えるか）

「リン、一瞬でもいいから外の景色を見て」

リンは恐る恐る顔を少し上げて外を見た

外を見るともう夕方だから遊園地はライトアップされ

多くの色で綺麗に彩られていた。

リンがその景色に見入っていた時

アトラクションが落ちた

「~~~~~！！！！」

リン…アトラクションの事、忘れてたな

何度か上がったり下がったりしてるとアトラクションが止まり
「皆さん、お帰りなさい。外の景色はいかがでしたか？」

シートベルトを外して、御足もとにお気をつけて
お降り下さい。」

スタッフの人が声をかける

「リン、歩ける？」

「うん…大丈夫」

まあ、大丈夫そうかな

「どうだった、リン？」

「うん、大丈夫…レンの言った通り

外を見た方が怖くないんだね」

「克服できた？」

「たぶん少しはね？」

リンはさっきより表情が少し明るくなっていた

「さてと…そろそろパレードが始まるけど行く？」

「ううん、いい

もう一度だけ景色が見たいから

観覧車に行ってもいい？」

「いいよ」

リンが観覧車に行くと言うのは珍しいな

普段ならジェットコースターとかなのに…

そう思いながら乗り場に歩いて行った

近くではパレードの音や観客の声が聞こえてくる

観覧車はパレードのおかげで空いていたから

すぐに乗る事が出来た

「リンが観覧車なんて珍しいね？」

観覧車が四分の一を過ぎた辺りで聞いてみる

「えっ？まあそうかもね

でも、もう一度だけ高い所から景色を見たかったから

この遊園地で一番、高いアトラクションはこれくらいでしょ？」

「確かにねっ!？」

そんな話をしていると一番高い所に到達した直後

観覧車が止まって大きく揺れた

「皆様にお知らせいたします。観覧車は安全装置が作動した為現在、運営を見合わせています。大変、申し訳ございませんがそのままの状態でお待ちください。」

「何があつたんだろうね？」

アナウンスの後、リンが聞いてきた

「わからないけどすぐに動くんじゃない？」

スタッフの人の指示に従って下さいとか言っていなかったし」

「そっか…でも、止まって良かったかも」

そう、リンは笑って言った

「何で？」

「だって丁度、一番上だから景色が綺麗じゃない？」

リンは外を指さしながら答えた

外を観ると遊園地だけでなく色々な明かりで彩られた町を見る事が出来た

「そうだね…」

しばらくすると観覧車が動き始めた

「動き始めたね」

「うん、もう少しだけ止まっててもよかったのに」

リンがそう言った瞬間

夜空に大輪の花が咲いた

「あ!…花火が始まったみたいだね、レン」

「そうだね」

「そうだ！レン、来年もまたここで花火を一緒に見ない？」

「いいよ、でも来年は花火大会も一緒に見に行こうな？」

「私とレンの予定があればね？」

リンはそう言いながら笑っていた

花火（後書き）

…リンレンの部活って何でしょうか？

何となくリンが弓道でレンが剣道だといいなあ、みたいに思ってます
ありえないような気がします（＾―＾；）

そこは読んで下さる方のご想像にお任せします！

観覧車の件ですがおそらくあり得ないと思います。

なので子供が乗る時にこけたからスタッフさんが安全装置を作動させた

この様に解釈していただければいいかなと思います。

あと1，2話で完結だと思いますが悩んでいます。

翌日の話を書くか書かないか…

書いたとしても短くなるような気がするんですよ…

元を読んだ友人は「別にどちらでもいいと思う」と言っていたので

…このリンレンは私の手に負えるのでしょうか？

兎に角、頑張ってみます！

気持ち（前書き）

次話です。

タイトル意味不かもしれませんが最後にわかると思います。

書いた本人が若干、読めません！（どうでしょう?!）
レン視点です。

…これが一番グダグダになってしまった気がしてなりません（ノ；
）

それでも良いという方はどうぞご覧ください。
よろしく願います！

気持ち

「レン、何か食べて帰ろう?」

遊園地から駅に行く途中、リンが言ってきた

「いいけど…」

「じゃあ、レンの食べたい物で!

スイーツは無しね?」

「それじゃあ…学校の近くにあるオムライスの店で」

「そんなお店…学校の近くにあった?」

「なかったら言っていないよ?」

そう答えて店に向かった

その店は俺とリンが通っている学校の近くにあるレストランだ

「私はチーズインハヤシソースのオムライス頼むけどレンは?」

「ん?俺は…チーズオニオンスープで」

「スープだけでいいの?」

「いいけど…何?」

リンが不思議そうな顔をして…

「…レンの気持ちってよくわからない」

そう言ってきた

「そう?そんな事ないと思うけど」

「昨日の勝負の後から考えてる事

よくわからないよ」

そう言われた

「美味しい〜!」

リンはオムライスの味にご満悦の様だ

俺はそんなリンの様子を見ながらスープに口を付けた

「レンはよくここに来たりするの？」

「ん？まあ…よくではないけど」

部活や学校の帰りに来るよ」

「へえ…で？注文は何時もそのスープなの？」

「まあ、そうかな？」

オムライスとか食べたなら夜ご飯が食べれなくなるし」

「そっか、メイコ姉に怒られるからね」

話しながらもリンはオムライスを食べている

「そういえばルカ姉かメイコ姉に連絡した？」

「ふえ？駅でメール入れといたから大丈夫だよ」

「そう…」

「ごちそうさまでした！

美味しかった」

どうやらリンはこのオムライスが気に入ったらしいな…

リボンが跳ねてるから…本当にあのリボンは何なんだ？！

「ん？レンどうかした？」

「え？いや、何でもないよ

じゃあ、帰ろうか？」

俺は伝票を持って席から立った

店から駅に向かっている途中

ミク姉から連絡がきた

「もしもし？今どこにいろの？」

「今？今は学校近くの駅だけど？」

「学校の？」

もう…今、車でそっちに迎えに行くから

そこから動かないでよ？」

「うん、わかった

ありがとう」

電話を切って

携帯をポケットになおしていると

「ミク姉、何て？」

「迎えに来るからここから動くなって」

「そう…」

リンはそう言う少し伸びをした

「疲れた？リン」

「え？まあ少しはね

今日は普段より歩いたし」

「ミク姉を待つてる間そのベンチに座っとく？」

そう言っでベンチに座って待っている

リンは疲れからかすぐ眠ってしまった

（そっういえば遊園地で、はしゃいでたからな

それにしても…ミク姉は遅いな

電話から30分は経ってるけど…）

そんな事を考えていると青い色をした

RX8に乗ってミク姉とカイト兄が迎えに来た

どうやら運転はミク姉がしているようだ

「お待たせ！カイトお兄ちゃんが車に酔ってダウンしちゃって

遅くなっちゃた！ごめんね？

あれ？もしかしてリンちゃん寝てる？」

「うん、まあね」

そう答えながらリンを起こさないように抱きかかえる

「ミク姉、悪いけど後ろ開けてもらえる？」

「うん、ちょっと待ってね。

カイトお兄ちゃん？しっかりしてよ！

お兄ちゃん側の後部座席のドア開けてあげて？」

「うーん、気持ち悪い…」

ミク、わかったから少し待って」

カイト兄はのろのろした動作で後ろのドアを開けてくれた

俺は抱えていたリンを座らせてから隣に座る

「ありがとう、ミク姉にカイト兄」

「どういたしまして、でもあんまり遅くまで遠くに行っちゃ駄目だよ？」

「うん、わかってる。ありがとう」

でもミク姉も心配し過ぎだよ？俺もリンも高校なんだし…
ところでカイト兄…大丈夫？」

体調があまり良くない兄に声をかけてみる

「うゝん…大丈夫ではないかな？」

でもしばらく休めば治るから…」

「そう…」

最初からミク姉が運転してたの？」

「ううん、始めはお兄ちゃんが運転してたんだけど

近道に入ったらお兄ちゃんが目を回して酔っちゃって

仕方なく私が運転してるんだよ」

「そ、そう…」

（カイト兄らしいと言えばカイト兄らしいな

この駅までの近道は…S字みたいにカーブが多いから）

それから俺はミク姉が運転する車の中でレストランであった
リンとのやり取りを思い出す

「…レンの気持ちってよくわからない」

「そう？そんな事ないと思うけど？」

「昨日の勝負の後から考えてる事

よくわからないよ」

（よくわからない…か

リン、お前はよくそう言うけれど

素直な言葉を言ったって気持ち悪がるだけだろ？

こんな性格の俺だけどお前にはわかってるだろ…

俺がリンの考えているのがわかるように

面と向かつては言わないけど…

リン…俺はお前がいるだけで感謝してるよ)

思わず微かに笑いが零れる

「レン君どうかした？」

ミク姉がバックミラー越しに聞いてきた

「いや…何でもないよ」

「そう？」

それからミク姉は前を向いて運転している

カイト兄は気分が悪いから寝てる

リンも疲れから寝てる

俺はリンの寝顔を少し見ながら

車の窓から星を眺めていた

気持ち（後書き）

ありがとうございました。

グダグダで申し訳ありません！

何故、レンにあんな事言わせたのでしょうか???

書いた本人のくせにわかりません（^| ^ ;）

おそらく次話で終わらせると思います。

まとめる事ができればですが…

ここから先はまだ書いていないんです。

テストがあるので近日中とは言えませんが頑張ります！

余談ですが…

カイトの愛車にしている青のRX8存在はします。

兄曰く「RX8の青色は多い」だそうです…

兄が黒の8なので知っているのですが後部座席に乗るには
まず前のドアを開けてから後ろを開けて

後ろを閉めて前を閉める…みたいになります。

良い車ですが…正直、面倒です…

朝（リンver）（前書き）

初めは昨日帰って来てからのレン視点

翌朝　　からはリン視点になります

翌朝のリンちゃんとかルカさんのやり取りです。

…前話からグダグダですがそれでもいい方は
どうぞご覧下さい。

今回は歌詞を使用していません！

朝（リンver）

家に着くとメイコ姉とルカ姉が家から出てきた

「カイト！？大丈夫？！」

「ありがとう、めーちゃん

でも大丈夫だから心配しないで？」

カイト兄が言いながら降りると

足がフラ付いていて慌ててメイコ姉がカイト兄を支えていた

「もう無理しないの！」

メイコ姉はそんな事を言いながらカイト兄を部屋に運んで行った

「レン君、リンちゃん寝てるから先に降りる？」

後だと出にくいと思うから」

「うん、ありがとう」

俺はそう答えてリンを起こさないよう抱きかかえながら

車から降りるとルカ姉がドアを閉めてくれた

「今朝からありがとう、ルカ姉」

「いえ、別に構いませんよ？」

それより…部屋まで大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫

明日は学校側の用事で俺もリンも休みだから」

「わかりました。ミクちゃんもお休みですか？」

ルカ姉は車から降りてきたミク姉に声をかけた

「ううん、私はその用事のお手伝いだから何時も通り学校があるよ」

「そうでしたか。わかりました」

「じゃあ俺はリンを寝かせてくるから」

「気を付けてね？」

「わかってる」

そう言ってリンの部屋へ向かった

リンの部屋を開けて

リンをベットに寝かせた

（よっぽど疲れてたんだな

まあ、明日も休みだからよかったかな）

リンの前髪を整えてから

もう眠っているリンに

「お休み、リン」

そう言ってから静かにリンの部屋を出た

翌朝

「うん？」

私の部屋？？……そっか

昨日ミク姉を待つてる間に寝ちゃったんだ」

壁に掛けられた時計を見るとまだ朝の5時半だった

（5時半か…今日は学校休みだったよね

……お風呂にいつてこようかな）

そう思い部屋を出ると

微かに力チャカチャと音がする

（何？誰か起きてるのかな？？）

音のする方へ向かうと

ルカちゃんが台所で朝食とお弁当を作っていた

「あ、リンちゃんおはようございます。

今日はお休みなのに早いんですね？」

私に気がついたルカちゃんが言ってきた

「おはよう、ルカちゃん

目が覚めちゃって…でもルカちゃんの方が早くない？？」

「そうですか？私は何時も5時前に起きているので

そうは思わないのですが…

さてと、これでいいですね。」

そう言いながらルカちゃんは4つのお弁当を包んでいた

（5時前って早くない?! 冬場だったらまだ真つ暗だよ?!
あれ? お弁当が4つ??）

「今日はルカちゃんも仕事?」

包まれたお弁当を見ながらルカちゃんに聞いてみる

「ええ、今日は夜には帰ってきますけど」

「そうなんだ、今日は出張?」

「そうですよ?」

「何処に?」

「今日は沖縄です。午前中に向うに到着して

5時頃に出発しますから何もなければ夜には帰ってきますよ
それがどうかしましたか?」

「ううん、何でもない

あ! お風呂って大丈夫?」

「昨日はそのまま寝てましたからね

大丈夫ですよ。」

「そっか、ありがとう」

そう言って台所を後にした

（ルカちゃんも大変だなあ…

朝早くから皆のお弁当や朝ご飯を作ってくれて
色々な所に行って帰って来て…）

湯船に浸かりながらルカちゃんとのやり取りを考えてみる

（この家で一番忙しくしてるのルカちゃんじゃないかなあ

カイト兄は仕事はあるけど8時に出て夕方には帰ってくるし

メイコ姉はカイト兄と一緒に出て夕方には…いや、遅い時もあるね
一次会とか二次会とかで稀に三次会とか行くみたいだし…

ミク姉は生徒会や部活はあるけど私とよく帰るし

レンは委員会や部活でも大体同じ時間に帰ってくる…

ふう…ん？お風呂に入って考え事してたら眠くなってきたな
何時もと全然違う時間に起きたからかな？

軽く目を擦る

（もう一回だけ軽く寝ようかな…）

そう思いお風呂場から出て着替え

ルカちゃんがいいた台所に向かう

「ルカちゃん、私は部屋にいるから…」

目を擦りながら言う

「わかりました。疲れが残っているでしょうから
今日はよく休んで下さいね」

そう笑顔で言ってくれた

「うん、ありがとう」

ルカちゃんが出る時に言えないかもしれないから
ルカちゃん気を付けて行ってきたね？」

「ありがとうございます。」

お休みなさい、リンちゃん」

そう言われて部屋に戻ってベットに横になると
すぐに眠ってしまった。

朝（リンver）（後書き）

……はい、わかってます。終わらなかったですね…やっぱり
本当はルカとレンのやり取りを書くはずでしたがわからなくなった
ので

こっちにしました。はただルカレンが意外と好きだからだけです。
何時か書ければと思います。

さて設定でも書かなかったのですが皆の仕事は何でしょう???
カイトとメイコは何でしょう???謎ですね…

もうこれ自然消滅するのでは…?

何とかまとめないといけませんね…頑張ります。

ですのでもう少しだけお付き合いしてあげて下さい。

よろしく願います。本当に申し訳ございません!!!

朝（レンver）（前書き）

次話です

前話の事です、タイトルを変えて少しだけ内容を変えました
変えたと言ってももう一度読む必要があるほど変えてません
なので別に気にしないでください

今回はタイトルの通りレン視点です。

前話でリンが寝てから1時間ほど後の話です

駄文でも構わないという方はどうぞご覧下さい。

朝（レンver）

「カイトー！行くよー！！」

「い、今行くから！ちよつと待ってよ、めーちゃん！！」

「それじゃあ、行つてきまゝす」

玄関の方からカイト兄とメイコ姉それにミク姉の音がする…

「はい、お気を付けて行つてらっしゃい」

少し遅れてルカ姉の声が聞こえてきた

「ん……あの三人が出たつて事は7時頃か」

昨日、寝たのは…リンを部屋に運んだのが11時

その後、お酒で酔ったメイコ姉をルカ姉と介抱してたから…

寝たのは12時頃だったかな…

そう考えてベットから体を起こして伸びをした

二度寝も考えたが今日はルカ姉が

仕事に行くのを思い出し着替えてからリビングへ向かう

リビングの扉から部屋を見ると

ルカ姉は椅子に座りながら手帳を確認している

「おはよう、ルカ姉」

俺はリビングに入ってルカ姉に言った

「あ、おはようございます。レン君」

ルカ姉は手帳から目を離してそう言った

「ルカ姉、今日は出張だったよね？」

「ええ、これから沖縄へ行つて…」

何事もなければ夜には帰ってきます」

「そうなんだ…」

ところで、リンはまだ寝てるの？」

ルカ姉の向かい側の椅子に座ったまま
廊下に面している扉を見る

「リンちゃんは５時半頃に一度、起きて

またお休みになってからまだ来てはいません」

「え？起きてまた寝たの??」

「ええ、昨日の疲れが残っていた様で

もう一度、部屋で休むと言っていました」

そう言つとルカ姉は椅子から腰を上げた

「そっか…」

「レン君、朝食どうされますか？」

「え？ああ、ルカ姉ありがとう」

でもリンが起きてきてから一緒に食べるよ」

「そうですか、ではここに置いておきますから
後でリンちゃんと食べて下さいね？」

「うん、ありがとう」

ルカ姉は今から出るの？」

「ええ、では行つてきますね？」

「うん、気を付けてね？行つてらっしゃい」

ルカ姉は仕事に行つてしまった

(…さてと、どうしようかな

リンはおそらくまだ起きてこないだろうし…

掃除とかはルカ姉が昨日してたし…

ゲームでもして時間を潰そうか

リンは遅くても９時頃には起きてくるだろうし)

そう思い部屋からDSを取ってきた

最近、俺がしてるゲームはブラックだ

（よし…今日こそアイツの色違いを出してやる）
俺は椅子に座ってゲームの電源を入れた

朝（レンver）（後書き）

えっと…すいません！謝りたいので謝ります！！
ブラック&ホワイト楽しいですね？

学校でも友達と量産して欲しい能力値を出したり
色違いを粘ったり…色々してます。

はい、ある種の廃人です。あえて否定はしません…
なのでポケモンはそれなりに答える事が出来ます！

ちなみに新作は総合プレイ時間24時間くらいで殿堂入りしました。
レンは一体何の色違いを狙っているのでしょうか？

さてと…は置いておいて

他の物を考えているからか見事にまとまりません！

どうでしょうか…？

後ですね…カイトやメイコ、ルカの職業考えてみました！

まずカイトが理数か体育の教師でメイコが国語か社会の教師

ル力は…英語か音楽、もしくは美術の教師…という考えになりました
たが

読んでくださっている方はどんな考えなのでしょう？

差し支えがなければ教えていただきたいです。

では、またよろしく願いいたします。

朝ご飯（前書き）

次話です！

今回はリン視点です。

駄文でもいいという方はどうぞご覧下さい
よろしく願います。

あと忘れていましたが一つ注意していただきたい事があります。

「」の様に「」が二重になっている部分が一ヶ所あります。
そこは二人が同時に言った、と考えて下さい。よろしく願います。
す。

朝ご飯

「ん…9時前かな…ちよつと寝すぎたかな？」

目を覚まして一つ伸びをする

（昨日は…帰りから寝ちゃって一度5時半に起きたから大体…9時間位は寝てたのかな？そんなに言うほど寝てないか…でも…3時間前より疲れは取れたみたい）
私が着替えてからリビングに向かうと

レンは何かに集中していた

（またゲームでもしてるのかな…よし！）

私はレンを驚かそうと足音を消して近付いた

レンに手を伸ばした瞬間

「おはよう、リン」

「！？………何でわかったの？」

「別に？何となくだよ…」

今、朝ご飯持ってくるから座ってて」

レンはそう言うのとDSの電源を切って台所に向かった

「ねえ、レン

ルカちゃんも行ったの？」

「え？うん、今から1時間半位前に行ったよ」

レンは朝ご飯持って答えてくれた

「はい、リン

紅茶でよかったよな？」

「え？うん、ありがとう

あれ？レンもまだだったの？」

私は向かいに座ったレンに聞いた

「ん？ああ、リンが起きてくるまで待ってた」

「別に待つてなくてもよかったのに…」

「この前、リンが言つてただろ？」

「一人で食べるのあんまり好きじゃないって」

「確かに言つた事はあるしそれは本当だけど…」

「でも私が起きてくるまで何してたの？」

「ん？ブラツク」

「何かいいの出た？」

「私はレンが淹れてくれた紅茶を飲みながら聞いてみる

「ん…特にはないかなあ？」

「あ、でも…強いて言うならヒトモシの色違いかな？」

「色違いか…」

（う…ん…ルカちゃんとレンだったら

どっち方がお茶を淹れるの上手かなあ？）

「そんな事を考えながらまた紅茶に口を付けた

「リン、どうかした？」

「え？ううん、何でもないよ」

「私はそう答えて朝ご飯のサンドイッチに手を付けた

「「ごちそうさまでした」」

「私とレンは同時に言つた

「ぷっ、ははは！」

「いきなり笑うなよ、リン！」

「ごめん、ごめん！あははは…！」

「ヤバイ、笑いが止まらない！」

「リン、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから！」

「少し涙が出た

「はあ…私が後片付けするから」

「ありがとう、リン」

朝ご飯（後書き）

えっと…何でしょう？

朝食がサンドイッチ多いですね…

レンはヒトモシではなく別の色違いを狙っていたのでしょうか？

ちなみにヒトモシの色違いは初めは水色でランプラ では赤紫…でしたか

そしてシャンデラがオレンジ色です。

私はハロウィンっぽいので意外と普通よりは好きですね…

さて…何時完結になるのかもう私でもわからないです…

時間がかかるかもしれませんね…頑張ります！

よろしく願います。

相談（前書き）

読んでる方は少ないと思いますがお久しぶりです。

約1ヶ月は空いてしまったみたいですね…

はさて置き…

サブタイトルに書いていますがリンがレンに相談してる感じでは久しぶりですし間が空いているので書き方も少し変っているように感じます

毎度の事です駄文でも構わない方はどうぞご覧下さい

相談

「…ねえ、レン？」

「ん、何？」

朝ご飯の後片付けを終えたリンは

椅子に座って本を読んでいた俺の横の椅子に座る

「今日は皆が帰ってくるの遅くなるって言ってたっけ？」

「まあ…そうだけど？」

それがどうかしたの？」

本を読みながら答えた

「え？ いや…特にはないんだけどね？」

何時もルカちゃん色々してくれるじゃない？」

「まあ、そうだね…」

ルカ姉に負担かけてると思うよ…」

そう言いながら読んでいた本から目を離した

「でしょ？ だから…」

今日何か出来る事ないかなあ？と思ったの…

でも掃除とかはルカちゃんがよくしてくれてるからね？

土日は体調が少し悪かったのか仕事は休んでたみたいだけど

私、ルカちゃんが仕事を休むの珍しいなと思ったもん」

リンもりボンも少しシュンとしながら横に座っている

どうやら、真剣に考えているようだ

「まあ…確かにね

でも、あれはメイコ姉が休ませたんだろ？」

「え、そうだったの？」

驚いた顔をしてリンが聞いてきた

「確かそうだよ？メイコ姉が

ル力は仕事の休みの日も色々働き過ぎだから少しは休め！…って」
「そうだったんだ？」

確かにル力ちゃん色々してるもんね？

仕事に家事全般に…後は部活の顧問だっけ？

今日は休み明けで出張らしいし？」

リンはメイコ姉がル力姉を休ませた理由に納得できたようだ

「リン、話戻るけどいい？」

「え？あ、うん」

「ごめん、どうぞ？」

「俺に1つ考えがあるんだけど？」

「どんな事？」

「…今日は俺とリンで夜ご飯作る？」

「レン、頭良い！」

ありがとう！！」

リンはそう言っで飛びついて来た

「なっ！リ、リン！？」

「レン、どうしたの？」

ああ、ごめんごめん」

そう言っでリンは離れた

「いや…うん」

それから俺は顔をリンに見られないように椅子から立ち上り
持っていた本をリビングの隅にある棚になおして
振り返らずにリンに聞いてみた

「で？リンは作るとしたら何を作る？」

「それが…思いつきにくくてね？」

リボンがまたシュンとしている

一つ息を吐いてからリンの隣に座って

それとなく思いつかない理由を聞いてみた

「何で思いつきにくいのか？」

「だって…ルカちゃんあんまり好き嫌い言わないし

苦手なものだとしてもそれを隠しながら食べるでしょ？

だから、ルカちゃんがどんなのが好きかわからなくて…」

……成程ね

確かにルカ姉は家族にも本音とか全く言わない

何時も自分の中に閉じ込めて出そうとしない…

それは本人が特に気にしていないから

でも好き嫌いは別の話…

直接、言ったりはしないけれど

ルカ姉の好き嫌いは注意深く見ていると

…いや、声を聴いているとよくわかる

ルカ姉の声は普段は綺麗なアルト

でも、苦手な物を食べた時は少し声が上がって

語尾が上げ調子になる時がある

おそらく、この事に気が付いているのは

本人を除いて俺だけだと思う…

実際、リンは気が付いていないしな

あ、でも隠しながら食べてる事には気付いてたのか

「…………カイト兄と逆なんだよ」

「え？レン、何て言った？？」

考えていたのか聞こえなかったらしい

「だから、ルカ姉が好きな物はカイト兄と逆なんだよ」

「え…そうなの？」

「そうだよ」

そう言うところには不思議そうな顔をしている

「レン…何で言いきれなの？」

「ああ…ルカ姉の癖を知ってるから」

「レンはルカちゃんの癖を知ってたんだ?!」

「ルカ姉の手伝いをしてたら

何となくわかってきたというか…」

「あ、そっか…レンよく手伝ってるもんね？」

ああ！だから紅茶の味が似てるんだ!!」

「え…紅茶？」

「そうそう！さつき気になってたの

ルカちゃんとレンの淹れてくれた紅茶の味が似てたから」

リンはまるで謎が解けた様にリボンを揺らしながら笑っている

（リン、お前…）

さつき…そんな事を考えてたのかよ）

「レン、どうかした？」

リンはスッキリしたというような顔をしている

「…いや、何でもない

で、どうするの？ルカ姉の好みはわかったし

何を作るか少しは考えやすくなっただろ？」

「うん、まあね？」

カイト兄と逆って事は辛い物って事でいいの？」

「まあ、そう言う事になるかな？」

辛い物は好きみたいけど

ルカ姉は辛い物を作る時はカイト兄に合わせてるから

だいぶ前にルカ姉と食べに行った時はかなり辛いやつを頼んでたしね」

「へー…そうなんだ？少し意外だったなあ
ん？じゃあ甘い物は嫌いなのか？」

「そうじゃないけど…まあ、好んでは食べないかな？」

アイスとかでもサツパリした感じのシャーベットを選んてるから」

「そっか…よし、今日はカイト兄には悪いけど

辛い物を作ってみよう！！！」

リンがそう言うとりボンがピョコピョコと跳ねている…

（リンのこの表情は…

正直、嫌な予感しかない…）

「……念の為に聞いておくけど

どれくらい辛くするの？」

「え？えつと…意識が逝っちゃう位？」

リンは今にもテヘツとか効果音が聞こえてきそうに言った

リボンもよく跳ねている…

「…カイト兄がいるから

意識が逝くほど辛いのは却下

それで何を作るの？」

「ええ！でもカイト兄がいるから仕方ないか…

でも辛い物は決定だから…

四川料理がカレーかなあ？

レン、出来そう？」

「まあ、調味料とかは全部揃ってるはずだからどっちも作れるけど？」

「そっか！じゃあ、えーと…時間もあるしスープカレーにしよっか！」

「スープカレー？まあ、いいけど

…リン、とりあえず足りない物を買に行こうか
ついでにお昼でも食べに行く？」
時間を見ればもう11時半だった

「お昼は適当に買ってくればいいんじゃない？
時間がもったいないし…」

あとミクちゃんとかに連絡しといたほうがいいかな」

「そうだね…リンが連絡しといてくれる？」

「OK！じゃあ、買い物に行こ？」

「はいはい…でも、準備してからな？」

そう言っただけでもリンも出掛ける準備をし始めた
と言っただけでも家の窓とかは開けてはいなかったから
財布や家の鍵を取りに行ったり足りなさそうな物を確認するだけだ
けど

（…カイト兄は大丈夫かなあ？ルカ姉は余裕で大丈夫だろう
ミク姉やメイコ姉はギリギリ大丈夫だとは思っただけ…

リンがどれだけ無茶をするか…

カイト兄には業務用スーパーとかでアイスでも買っておくべきだな
…）

「レン、早くー！」

自室でそんな事を考えながら財布と鍵を鞆に入れていると玄関から
リンの呼ぶ声が聞こえてきた

「わかった、すぐ行くから！」

考えるのは後にしようそう思っただけ

部屋から玄関へ向かいリンと二人で買い物に出掛けた…

相談（後書き）

グダグダですいません（-_-;）

ボカロファンの方でイメージが崩れたという方にはお詫び申し上げます！

えっと…読んでいて気が付いた方もいらっしゃるかもしれませんが（そんなに読んでもらえてないと思ってますけど…）

私がリンとレンが作る料理を何故スープカレーにしたのでしょうか？

お気づきの方はそのままでおそらく合ってますから（^| ^;）でも、まあ…あの曲じゃないですからね？

では、また何時更新出来るかわかりませんし

完結に持っていく事が出来るかわかりませんが

お付き合いしていただける方はよろしく願いします。

帰り道（前書き）

買い物をした後の帰り道での出来事です。

どんな買い物だったのかは：読んで下さった方のご想像にお任せします。

それでは、駄文でも構わないという方はどうぞご覧下さい。
よろしく願います。

帰り道

「意外と時間がかかったね、レン？」

リンは俺の前を歩きながら言ってくる

答えたいけど今の俺はそれどころじゃない！

「……………」

「あれ、どうしたの？」

返事をしないのが気になったのかリンは振り返った

「リ、ン……………頼む、から…少しは、荷物持て！！！」

そう言つて、止まって両腕に持っていた色んな荷物を置いた
歩いていただけなのに息が上がっている

そう…買い物は必要な物だけ買つて帰るつもりだった

でも、リンが食材以外にも買ったりするから荷物が増えた

で！その荷物を何故か俺が全部持っている…否、持たされた

それから、今まで何故こうなったのか考えながら歩いて

もし、またリンと買い物に行く事になった時はどうするか悩んでいた

何故かと言うと、リンは色んな意味で目立つ…

中学の時は部活とかで心配はそんなにしていなかったが

高校に上がってから気になって仕方なかった…

普段からどこか抜けていて明るくて無邪気にはしゃいだり

感情をすぐに表し出してしまふ性格…

弟の俺でさえ可愛いと思う。

実際、中学の頃から学校で男子からよくリンの事を聞かれる

正直、うんざりしている…

もし、姉弟として生まれないでリンと出会っていたら

俺は間違いなくリンに惚れていただろう

だから、ちょっとデパートとかに行くとリンに向けられる視線が気

になって仕方がない

その度に俺はリンに話しかけたり手を引いて「こっちだろ?」とか言いながら

その場から離れたり、向うがいなくなるようにしたりしている
そんな俺の苦勞も知らないで…この姉ときたら
ずっと、楽しそうに買い物をして続けていた…

「あ、やっぱり重かった??」

リンは何故かニコニコしながらそう言ってくる

「当たり前だろ…さっきより手に力が入らない」

そう言つて、両手を開いたり閉じたりした

（人間つて…いきなり強い力とか使つとしばらく握力が下がるんだ
よな

これは袋のせいで血が止まつてたからだと思うけど…）

「ごめん、ごめん。半分は持つから…」

レンがどれ位持つていられるのかなあ、と思つてさ?

そう言つとリンは持つて来ていたリュックサックの中に
潰れにくい順に袋に入つていた物を入れるだけ入れていく

「よいしょつと…これで良し！」

レン、行こう?」

そう言つてリンはリュックサックを背負つて残りの袋を持った

「ん、わかった」

俺はそう答えて二人で歩きだした

「そういえば、レンと買い物したの久しぶりだったよね?」

「そう…かな?」

「そうだよ…中学に上がつてからはレンはルカちゃんの手伝いで
ルカちゃんと買い物に行つてたでしょ?」

「……そういえば、そうか

何？怒ってんの？？」

そう言ってリンを見てみる

「べ、別に怒ってはないけど……」

「けど？」

「中学からはお互い部活とか色々で……試合とかは観に行ったりしたけど」

遊びに行ったりする機会が少なくなったから……」

「やっぱり、怒ってるんだろ？」

「怒ってない！」

「怒ってるよ！」

「怒ってないってば！！！」

そんな事をしばらく言い合っていた

「そう言えば……何であんなに楽しそうだったの？」

空を見ながら俺の前を歩いていたリンに話しかけた

「え？」

「買い物……何がそんなに楽しかったの？」

「ああ、気になるの？」

リンは不思議そうな顔をして振り返った

「そりゃ、そうだろ？」

「そうだなあ……私が楽しかったのは

通り過ぎる女の子達、皆……レンの事を見てたからかな？」

「……え？」

「気付いてなかったの？」

……言われてみれば

デパートでは女の子の話声や、視線を感じていたような気が……

でも、視線のほうはリンに向けられているものだとばかり……

「レンって意外と鈍感ね

昔からそうだったけど？」

リンは笑みを零しながら言ってきた

「…リンにだけは言われたくないで、何でそれが楽しいわけ？」

「だって…」

私のレンはこんなに格好いいのよ、て

見せびらかしてるみたいで気分が良いんだもん」

「わた…！？」

リンは笑いながらそう言った

（落ち着け。相手はリンだぞ？

リンに何か期待するだけ無駄だ…）

「今のでわかった？」

私が何で楽しんだか」

「…よく、わかりました」

「そっ？」

リンは笑いながらまた前を向いて歩いている

俺はリンの横に並んで歩き始めた

「レン、どうしたの？」

「ん？いや…何でもないよ」

それから家までずっと並んで歩いて帰った

帰り道（後書き）

…すみません

少し、危ない方へ行った気がするのには気のせいでしょうか？
遅くて申し訳ありません…

後しばらくしたら完結に持っていけそうな気がします…

気がするだけです…当てにしないで下さい

ハバネロ（前書き）

サブタイトルがわかりずらいと思います。すみません
それにかなりぐだぐだです…

それでもいいという方はどつぞどつぞご覧下さい

ハバネロ

「じゃあ、材料は俺が切るから調理はリンがしてね？」

「え、私だけで調理するの？」

「だって、作るって言い出したのはリンだろ？」

俺はリンに分量とどうするか言うから」

家に着いてからリンに言った

それから、俺は普段からルカ姉を手伝っていたから全部の材料を切り揃えるのに時間は掛からなかったでも、リンが台所に立つのはお菓子を作る時だけそんなリンを見ていて正直…危なっかしい

俺が切った野菜の素揚げの時

火が強いから…俺がそれを指摘したら

『そうか、火が強かったのか』なんて言ってくるし

本当に学校の家庭科の調理実習とか大丈夫なのか心配だ…

主にリンと同じ班の人達が…

そんな事を心配されているとは知らない

リンは今、スープカレーのスープを作っているけど…

本当に普段…あのお菓子をちゃんと作っているのか？と疑問に思う

「レン…？チリペッパーってどれ位入れたらいいと思う？」

リンはさっきからずっとスパイスボトルを振っている…

後片付けをしている俺に聞いてくる

（毒々しい位に色が赤いな…

カイト兄…ごめん、俺でもこのスープカレーの辛さを扱える自信がない）

「……………リン、それ入れ過ぎ」

「え！そうなんだ？

でも、カイト兄に合わせる訳じゃないからいつか」

リンは恐ろしいほど楽しそうにしている…

（リン、カイト兄の為にも

せめて…せめて、ハバネロペッパーには気が付かないでくれ！

あ、でも後はスープを煮込めれば終わりか…）

ここで俺はやつと安堵のため息を吐いた

「煮込み終えてから約30分」

準備は出来たから片付けを終えて二人でリビングでゆっくりしていた

「あ…そういえば」

急にそう言ってリンは台所に向かった

「？」

不思議には思ったが俺は読んでいた本に視線を戻した

「ねえ、レン

これかなり入れたけど…結局何なの？？？」

リンは台所から一つの赤いスパイスボトルを持って来た

「え？どれの事を言って…」

本から目を離してリンの持っている物を見て血の気が引いた

「リ、リンさん…それだいたいでいいから答えてくれ

スープに…どれ位の量を入れた？」

「え、何でリンさんなの？」

ん…全部レンの言った量の倍くらい入れたから

でも、これは確か…10回か15回は振ってた気がする」

リンはよく思い出そうとしている

（カイト兄…ごめん、終わった

俺がもっと注意してリンを見ておくべきだったorz）

「レン、どうしたの？」

これって何なの？」

「……ネロ」

「え、今何て言った？」

「その名前はハバネロペッパーって言うんだ」

「…………え？」

んゝヤバいな」

俺の答えを聞いて流石のリンもどうしようか迷っている

「…リン、さっきスパイス取りに行った時

近くに白ワインに漬けたレーズンはあったよな？」

「え？…あ、うん

あったと思うけど…

それがどうかしたの？」

「リン、俺はちよつと買い物に行ってくるから留守を頼む

それから、スープカレーは絶対温めるな！」

「え？！ちよつ、レン！！！」

それだけ言つて俺は急いで買い物に行った

ハバネロ（後書き）

ぐだぐだですいません…

えっと、私は試した事がないのでわからないのですが

白ワインに漬けたレーズンをカレーに入れると甘くなるそうです

唐辛子の辛味は温かいと辛いですが冷たいと辛さは抑えられるそうです

さて、レンは何を買いに行っただのでしょうか？

もしかしたら読んでくださった方の家にもあるかもしれませんね？

味見（前書き）

えっと…結構長くなったような気がします
久しぶりにミクが出てきます

今回はリン視点です

駄文でも構わないと言う方はどうぞご覧下さい

味見

レンが出て行ってからしばらくしてミク姉が帰って来た
「ただいまー！」

リンちゃん、レン君は出掛けてるの？」

ミク姉は制靴を持ったまま聞いてきた

「お帰り、ミク姉

うん…ちよつと買い物に行ってくるって」

私はレンが出掛けてからずっとソファに座りこんでいた

「そつか…リンちゃん、ちよつと荷物とか部屋に置いてくるから待
つてて？」

そう言つてミク姉は部屋に行った

（ハア…レンの言う事ちゃんと聞いていればよかった…

あと、確かめてから使えばよかった…）

さつきからため息ばかり吐いていた

近くのクツションにボスンと顔を埋めると

丁度、ミク姉が部屋から着替えて戻ってきた

「リンちゃんどうしたの？」

レン君と何かあったの？」

ミク姉は私の隣に座って心配そうな顔をして聞いてくる

（ミク姉の心配性は相変わらず変わらないね…）

そう思うと少しだけ何故か気分が楽になった

「ううん、レンとは喧嘩とかもしてないよ…

ただ、カレーが原因で落ち込んでたんだあ」

私はクツションから顔を上げてミク姉にさっきの出来事を話した

「ううん…」

ミク姉は私の話を聞いてからずっと唸っている

私はそれを不思議そうに見ていた

「ねえ、リンちゃん？」

「何、ミク姉？」

ミク姉は少し笑いながら言ってきた

（何を考えているんだろう…）

私はキョトンとしていた

「そのスープカレー…ちょっと食べてみない？」

ミク姉は微笑みながら私の言ってくる

「え…ちよつ、何言ってるの?!」

私は驚いてミク姉を見た

「だって、味がわからないと調整できないでしょ？」

レン君だって何か考えがあって買い物に行っただけだと思っ

私とリンちゃんが食べてみてほしいの味が分かれば

レン君も助かると思うしね？」

「確かに…」

「でしょ？リンちゃんが嫌なら私だけ食べてみるしね」

ミク姉は笑いながらそう言ってきた

「そ、それだけはない！」

ミク姉一人だけに危険な事させたくない!!」

「それじゃ、食べてみよ？」

そう言って二人で台所に向かった

「あ、あのさミク姉？」

レンから絶対に温めるな、って言われてるから温めなくていいよね？」

恐る恐る小皿を持ったままミク姉に言ってみた

「レン君に言われてるんじゃないね？」

ミク姉はさつきと違って真剣な表情をしている

私はそれを見てからカレーが入っている鍋の蓋を取って

小皿に少量入れてミク姉に渡した

「はい、ミク姉」

「うん、よし！じゃあ思い切って飲んじゃおう！！」

ミク姉がそう言って二人で同時に飲んでみた

「辛

！！！」

二人とも同時に叫んだ

ル力ちゃんが作るカレーより何倍も辛い…

「かはっ！み、ミク姉大丈夫？」

辛さで少し咽ながら言ってみる

「けほっ！な、何とか…想像以上に辛かったね」

ミク姉は喉を手で押さえている

二人とも少し涙目になりかけだった

「リン、ただいま！！！」

丁度、レンが帰って来た

「あ、帰って来た」

「レン君ナイスタイミング！」

レンは台所に来ると唖然としながらこつちを見ていた

「えっと、聞きたくないし見たらわかるけど…

二人とも一体、何したの？」

レンは買ってきた物を台所に置くと聞いてきた

「ちよつとだけカレー食べてみたんだよ」

ミク姉はさつきと同じで喉を押さえたままレンの質問に答えた

「はあ…この馬鹿！」

レンはそう言っていると買い物袋からかなり大きいアイスを出して冷凍庫に入れて

それから冷蔵庫から牛乳を取り出して

それを二つのコップに入れて私とミク姉に渡してきた

「はい、これ飲んで」

レンは少し顔を顰めてそう言った

「何で牛乳なの？」

「リン、質問する前に早く飲め！」

レンはどうやら少し怒っているらしい

仕方なく私とミク姉は言われた通り牛乳を飲んだ

「これで少しは楽になっただろ？」

レンは飲み終えた私達に言った

「あ、本当だ…さっきより少し楽になってる」

ミク姉は不思議そうに言った

「確かに…でも、何で？」

私は不思議そうな顔をしてレンに聞いた

「水とかお茶だと飲んでも辛さを洗い流すだけだけど

牛乳は洗い流すだけでなく牛乳に含まれている脂肪分が舌全体を覆うから辛さが多少和らぐんだ

あと、カレーは刺激物だから食べると胃や食道に多少は負担がかかる
牛乳は飲むと胃酸を中和して胃の負担を減らす事が出来るんだよ…
だから本場の人とかはカレーを食べた後にラッシーやチャイとかを
飲んだり

甘い物を食べたりするんだよ…」

「……………」

レンの回答に私もミク姉も啞然としていた

「……………あのさ、もういい？」

「え？あつ、ごめん

ところでレンは何を買いに行ったの？」

「ん？リンゴとマーマレードに牛乳とアイスそれからヨーグルト…
スープカレーに使うのはとりあえずリンゴだけ

使ったとしても気休め程度にしかないような気がするけど」

レンはそう言うとお手を洗ってリンゴの皮を剥き始めた

レンが手を動かす度シャリシャリと音がする

「レン君、リンゴだけ使うのなら何でマーマレードや牛乳、アイスにヨーグルトを買ってきたの？」

ミク姉が不思議そうにレンに聞いた

「マーマレードはカレーに一応合うからリンゴで駄目だった時に少し使うため

牛乳とヨーグルトは家に蜂蜜とレモンがあったからラッシーを作るため

アイスは…カイト兄対策の一つ」

レンはそう言うとおリンゴを剥き終えて

そのリンゴをすりおろしていく

「ねえ、レン

何か手伝える事ない？」

「ん…じゃあ、リンはラッシーの作り方を言うから量を量って作ってくれる？」

ミク姉はこれがどれ位の辛さだったか教えて」

「うん！わかった」

そう私もミク姉も答えた

味見（後書き）

…牛乳の部分ですが他にも説明の仕方があるとは思いました
でもそんなに深く説明しても長くなってしまうから…

どうでもいい事ですすが胃十二指腸潰瘍や逆流性食道炎の方の食事制限指導にカレーなどの刺激物は食べないこと、とありましたね

あとは…カレーに甘味料を使う場合ですがマーマレードの他にマンガチャツネ

風味を付けて甘味ならチョコレートで

風味だけならインスタントコーヒーを少量入れるといいそうです。

正統派なら大量の粗く切ったまたは1/8に切った玉ねぎを慎重に炒めて

仕上がり20分前に追加すると風味と甘味が増します

ここに書いたのはカレーを甘くしたい場合ですから気を付けて下さいますりおろした人参を使うのもありますけど…風味にだいぶ出るような気がします

以上です…長々と失礼しました

どうしようっ。(前書き)

えっと次話です

駄文ですがべつにいいという方はどうぞご覧下さい
では、よろしく願います

どうしよう？

「レン！材料これでいいんだよね？

こつからどうするの？」

「さっき言った分量を量って

全部ミキサーに入れて軽く攪拌して！」

レンはそう言うとかレーに再び視線を戻した

それからレンに言われた通り分量を量って

ミキサーに全部入れてスイッチを押した

モーターの回る音が聞こえる

「これ位でいいの？」

私はお菓子はよく作るからあんまり攪拌すると

バターみたいになると思ってたミキサーを止めてレンに聞いた

「え？ああ、大丈夫

別にバターみたいになってもおいしいけどね？

じゃあ、それは冷ましといて」

レンはまたカレーを見てる

私はラッシーを冷蔵庫に入れた

「レン…大丈夫そう？」

私は心配そうにレンを見た

「そんなに心配しなくてもいいよ…

さっきのリングゴちよつと食べたらけっこう甘かったからね

ただ問題はマーマレードは買ったけどこの家で使う人は少ないから

な…」

そう言うとなんは悩み始めた

確かに…家でジャムを使う人は甘党のカイト兄くらいだ

あとは私がお菓子とか作る時に少し使うだけ…

でもマーマレードは果皮が残っているから少し苦味があったりする

カイト兄もそんなに好んで使わないはずだ…

私は私でマーマレードを使ったお菓子はそんなに知らないし…

レンはそれも考慮して小さい物を買ってきたみたいけど
どうしたらいいんだろう？

「一つだけ私に考えがあるんだけど…」

レンと話をした後、電話がかかってきたミク姉が戻って来た

「ミク姉…電話してたのに話聞いてたんだ？」

レンは私の後ろにいたミク姉を見た

「レン…今それ聞く事？」

ミク姉、考えつて何？」

私は振り返ってミク姉に聞いてみた

「え」と…リンちゃんはお菓子を作るの得意だよね？」

「え？まあ…うん」

私はミク姉の質問に不思議そうに答えた

「じゃあ、ケーキとか作れない？」

「ケーキ？」

簡単に作れるけど…それがどうかした？」

ミク姉は別に確認しなくても私がお菓子を作るのが得意なのは知っ
ているはずだった

たまに一緒に作って私が教えてるのだから…

「ああ、成程そういう事か…」

レンはどうやらわかつたらしい

「じゃ、レン君あとよろしく

私はちよつと出掛けてくるから」

ミク姉はそう言うのと車の鍵をクルクル指で回しながら出て行った

「え…ちよつ！ミク姉？！」

私は訳が分からずミク姉が出て行った玄関の方を見ていると
外から車のエンジンの音が聞こえてきた

どうやらミク姉はカイト兄の愛車で何処かに行ったようだ…

「え…私だけ仲間はずれ？」

私は啞然としていた

「まだわからないの？」

レンは苦笑いしながら言ってきた

「え……うん」

そう言うとなんは笑いだした

「よくお菓子作ってるのにわからないの？」

「え………？」

「ミク姉にお菓子よく教えてるくせにわからないんだ？」

レンはまだ笑っている

「………！もう、いい加減教えてよ……！！」

私はそう言っとなんを思いつきり何度も叩いた

「痛っ！！？」

わかった、わかったから叩くな……！！」

レンがそう言っとなんから私は叩く手を止めた

「ケーキが何？」

レンはまだ痛いのか私が叩いた場所を押さえている

「ああ……まあ、例なんだけどさ？」

パウンドケーキ……とかさ？」

「パウンドケーキ？」

私はますます訳が分からなくなっとな

「だから、ロールケーキだったら生クリームにマーマレードを使うとかさ！」

レンは呆れた顔で言っとな

「……え？ああ！そう言っとな事？」

出来る出来る……！！」

レンはさっきと変わらず呆れた顔をしている

「何で気が付かなかったの？」

「盲点だった！」

そう言つて二人でしばらく笑つてから
皆が帰ってくるまでのんびりしていた

どうしよう？（後書き）

駄文ですいません

後少しですかね…

んゝ…27日までには出来るのなら完結させたいです…

電話（前書き）

サブタイトル「電話」にしたけどあまり電話は出ないです。
駄文ですがそれでもいいという方はどうぞご覧下さい

電話

「ただいま」

あれ、ミクとルカは？」

メイコ姉がカイト兄と帰って来た

どうやらカイト兄は先に自室に向かったようだ

「お帰り、メイコ姉

ミク姉はカイト兄の車で何処かに行ったよ

ルカ姉はまだ帰ってきてない」

そう言って俺は読んでいた本を閉じた

「おい、リン起きろ

メイコ姉とカイト兄：帰って来たよ？」

リンは俺が本を読み始めてしばらくしたら

俺の肩に頭をのっけて眠ってしまったから

俺は身動きがとれなかった…

「ん…レン何？」

リンは目を覚ましたが少し寝ぼけている

「だからメイコ姉とカイト兄が帰って来たって」

「リン、おはよう」

俺が言っただ後にメイコ姉は何故かクスクス笑いながらリンに声をかけた

「え？……ああ、お帰り」

リンは軽く目を擦りながら返事をした

「ただいま

荷物とか置いてくるからカイトにアイス盗まれないようにね？」

メイコ姉はそう言うとりビングから出て行ってカイト兄が来た

「ただいま、リンちゃんレン君

外に僕のエイトがいなかったけどミクが乗って行った？」

どうやら帰って来たら何時もある愛車がなくて気になったようだ

「お帰り、カイト兄

うん、ミク姉が乗ってどっか行っちゃった」

リンは伸びをしながら言った

「そっか」

エイトの空気圧とかチェックしたかったんだけど」

しょうがないな…そう言っただけでカイト兄は台所に向かった

「……………カイト兄何しようとしてんの」

俺がそう言っただけでカイト兄は冷凍庫に伸ばす手を止めた

「…駄目？」

「駄目に決まってるだろ！」

メイコ姉に言われてるんだから」

カイト兄にそう言っただけで

「めーちゃんの意地悪…」

ボソッと言っただけで手を引いた

「レン？」

携帯さっきから光ってるけど？」

リンに言われて携帯を見ると

電話がかかっていた

携帯を開いて画面を確認すると「ルカ」の2文字

「もしもし…」

「あーレン君

ルカです。」

「ルカ姉

…どうしたの」

「さっき空港に着いたので

これからミクちゃんと帰ります。」

「…え？」

ミク姉そこにいるの？！」

「ええ…飛行機に乗る前に連絡して来てもらいましたけど

ミクちゃんに代わりましょうか？」

「いや、別にいい

わかった、ミク姉に気を付けるように言っといて」

「わかりました。」

ルカ姉がそう言っで通話が切れた

「……2時間も何してたんだ？」

俺は携帯を見ながら呟いた

「どうしたの？」

ルカちゃん何て？」

リンは不思議そうに聞いてきた

「いや、何でもない

ルカ姉とミク姉もうしばらくしたら帰ってくるって」

携帯を閉じながらそう言くと

「本当に？」

お土産何かな？」

リンはリボンをパタパタさせながら笑っていた

いっ飯（前書き）

駄文ですのでそれでもいいという方はどうぞご覧下さい
では、よろしくお願ひします。

1 飯

「……帰ってきたかな？」

レンはそう言って台所に向かった

「何でわかるの？」

レンに聞いてみると

「耳澄ましてみれば？」

そう言ったので言われた通り耳を澄ましてみる
すると外から色んな音が聞こえた

（これが何？）

私がそう思っていると

「ああ…そんなに遠くはないね
もうすぐ帰ってくるね」

カイト兄が私と同じように耳を澄ましている
「？」

レンもカイト兄も何でわかるの？」

今度はカイト兄に聞いてみると

「リンちゃんはエイトの音って覚えてる？」

カイト兄は微笑みながら聞いてきた

「え、音？」

私がそう言つと玄関の方から車のエンジン音とルカちゃんの声がした

「ただいま帰りました」

ルカちゃんは笑って帰って来た

「ルカちゃんお帰り！」

ミク姉は？」

そうルカちゃんに聞くと

「ミクちゃんはカイトさんの車を入れてますよ？」

私は荷物を置いてきますね？」

そう言つてルカちゃんは自室に行った

「ふう…予想より早く着いたね」

そう言いながらミク姉が帰って来た

「ミク姉…2時間も何してたの？」

レンが台所から戻って来た

「え？あ…」

ルカちゃん待つてる間に色々お店とか見てた

あ！カイトお兄ちゃんこれエイトの鍵」

そう言ってミク姉はカイト兄に鍵を渡した

「え？ありがとう

ミク、エイトに乗ってて違和感とかあった？」

カイト兄は鍵を受け取りながらミク姉に色々聞いている

「……レン、あれ長引きそうだからルカ呼んで来てご飯にしよう？」

メイコ姉がテレビのニュースを観ながら言った

「え？あ…わかった」

レンはそう言ってルカちゃんを呼びに行った

しばらくしたらルカちゃんとレンが戻って来たからご飯になった

まあ…言うまでもなくスープカレーを食べて

初めに叫んだのはカイト兄

「辛

い！！！！」

（カイト兄…ごめん）

そう思って私は台所からラッシーを持って来て

「ごめん、カイト兄

これ甘いから少しは楽になると思う」

私は少しシユンとしながらラッシーが入ったグラスを渡した

「だ、大丈夫

ありがとう」

そう言いながらカイト兄はグラスを受け取った

「確かに何時もはルカがカイトに合わせて作ってるから

たまには辛いカレーもいいけど辛いね…」

メイコ姉も少しだけ咽ていた

私とミク姉は調整前の物を一度飲んでいたので

あの時よりは喉がましだった

レンはレンで平気そうに食べている

（レンって意外と辛いの大丈夫なんだ？）

そう思っていたらレンが咳き込んだ

レンは若干涙目で口を押さえている

（そうでもなかったか…

あ！そういえばルカちゃんは？）

そう思いルカちゃんを見ると笑いながら食べていた

「ルカちゃんは辛くないの？」

私はラッシーを飲みながら聞いてみた

「え？ええ、私は辛いものは好きですから

まだ辛くても平気ですよ？」

そう言いながらルカちゃんは笑ってカレーを食べていた

（え……レンから聞いてた以上にルカちゃん強い）

そう思いながら食べて皆が食べ終えた後

レンは洗い物を終えて冷凍庫から買ってきたかなり大きいアイスを

カイト兄に渡した

カイト兄以外はルカちゃんのお土産の紅芋タルトを食べていた

皆と話していた時

ポケットに入れていた携帯にレンからメールが着た

「ルカ姉によるこんでもらえたみたいでよかったな？

でも、もし今度また作る時は加減しろよ？」

そうメールには書かれていた

「レン、ちよつと散歩に行こう？」

携帯を閉じて紅茶を飲みながら本を読んでいたレンを散歩に誘った

「え？まあ、いいけど…」

レンはそう言っていると紅茶を飲んで本を閉じて立ち上った

「じゃあ、少しレンと散歩してくるね？」

メイコ姉にそう言ってレンと玄関に向かった

「もう暗いから二人とも気を付けないと駄目だよ？」

後ろからミク姉の心配そうな声がしてきた

「大丈夫！行つてきまゝす！」

ミク姉にそう答えてレンと家を出た

1. 飯（後書き）

車はそれぞれエンジン音が違います。

は知っている人が多いと思いますけど

私の兄のエイトは…正直煩いです

近づいてきたらすぐに分かります…

車はちゃんと点検してくださいね？危ないですから…

次話で終わらせます。

散歩と手紙（前書き）

最終話です…

何か…もつぐだぐだです

何時もの事です…

それでもいいという方はどうぞご覧下さい。

よろしくお願いします。

散歩と手紙

リンは楽しそうに俺の前を昼間と同じように歩いている
「リン、どうかしたの？」

俺は不思議に思ってリンに話しかけた

「レン、メール送ってきたでしょ？」

返事をどうしようか迷ったから

一緒に散歩にでも行って返事しようかなと思っただけ」

リンは笑いながら答えた

「何で？」

「内緒！」

兎に角！レン、今日はありがとう」

そう言ってリンは公園の中に入っていった

「そう言えば二人でここに来るの久しぶりだね？」

公園を見まわしながらリンが言ってくる

「確かに…小学校以来になるかな？」

時間が時間なので公園にいるのは俺とリンの二人だけだった

「たまにはこういう懐かしい所に来るのもいいね…」

リンはどうやら小学校の頃を思い出しているようだ

（学校が終わったら俺とリンとミク姉の3人でよく遊びに来たっけ…

あ…誰か砂場にスコップとか忘れてる

あの頃と変わらないなあ…）

俺もリンと同じように思い出しながら辺りを見回すと

一本の木に目が止まった

「リン、あれ憶えてる？」

俺はそう言ってその木を指さした

「え？ああ！」

憶えてるよ?」

そう言つてリンと俺はその木に近づいた

「ずいぶん大きくなつたねえ?」

リンは木を見上げながら言つた

「確かに…4年の時だつたっけ?

この桜の木の下にお互いの手紙を埋めたの」

そう思つて俺は木の根元を見た

「そうそう!

この木だけ他と違つて少し小さかつたからここに埋めたんだよね?

お互いに宛てて書いた手紙を小瓶に入れて」

リンは笑いながら言つた

「掘つてみようか?」

俺はリンにそう言つてみた

「え、手紙を?」

リンは驚いた顔をして聞いてきた

「別にあの時に何時出すか決めてなかつたし

二十歳の時に出そうとかそんなんじゃないただろ?」

「まあ…そうだけど

……でも、どうやって掘るの?」

「さつき砂場に誰かが忘れて行つたスコップがあつたから

それで大丈夫じゃないかな?

土も少し水分を含んで湿つてゐたいだし」

「じゃあ…出してみよつか?」

リンが笑つて言つた

俺はスコップを拾つてきて手紙を埋めたと思う木の根元を掘り始めた

「なかなか出てこないね?」

リンは少し心配そうに言つた

「もう少しじゃない？」

あの時、だいぶ深くまで掘ったから…」

俺はそう言って黙々と土を掘る

「でも、もしこのまま出て来なかったらどうする？」

珍しくリンがマイナス思考になっていた

「大丈夫だつて

そろそろ出てきてても…」

俺がそこまで言うとかツンとさっきとは違う音がした

「リン、ここら辺に携帯で光を当ててくれる？」

「え？う、うん」

そう言つてリンはポケットから携帯を出して

俺が言つた場所を照らしてくれた

すると土と違う物が微かに見えた

俺はスコップで周りを軽く掘つてから

その後、手で慎重に掘つていった

「あ…」

掘つていくと小瓶が出てきた

それを取つて穴を埋めてから

公園の水道で軽く土を落とすと中に紙が入っていた

「……リン、開けてみる？」

一応、リンに最終確認をしてみる

「う、うん」

リンがそう言つたのを確認して小瓶の蓋を開ける

「なっ！かった…」

うぐっ！」

蓋が回らなくて思いっきり力を入れてみた

「レン、大丈夫？」

リンは心配そうにしている

「大丈夫！も、う…ちよつと…！！！」

カポツと音を立てて蓋が動いた
蓋は少し動いた後はあっさり開いた
蓋を取って手紙を中から取り出して一枚をリンに渡した
「たぶんこっちが俺がリンに宛てて書いたやつだと思う
俺は手紙をこんな風に折らないから…
もし、間違ってたらごめん」
「たぶん間違ってたないと思う…
ありがとう」

そう言ってリンは手紙を受け取った

リンが手紙を開くのを見てから俺も6年前のリンからの手紙を読んだ

未来のレンへ

未来のレンは憶えてるかわからないけど

2年生の時に家に帰る途中でいきなり私に告白してくれたよね？

「僕はリンが大好きだから

僕はリンのそばにずっといる！

だから、リンも僕のいっしょにいて？

約束だよ？」って

あれ、すごいうれしかったんだよ？

あの時は何にも言わなかったけど

未来のレンにならあの時の返事を言ってもいいかなあ？と思って

レン、私もレンの事が好きだよ？

私はレンが側にいて欲しいし

私もレンの側にいたいよ？

ありがとう、レン

…こんな事もう言わないからね？

リンより

「……………」

リンからの手紙を読んだ瞬間

俺は顔中が真っ赤になった気がした

チラッとリンを見てみると同じ様に顔を真っ赤にしている
リボンもよく見てみると少しフニャっとなって
微かに気のせいだと思うけど赤くなっている

「えっと……………リン？」

俺がリンの名前を呼ぶとリンはビクリと反応した

「な、何？」

「俺…さ」

手紙に……………何書いてた？」

そう俺が聞くと

「え！そ、その…あの

わ…私は？」

リンはさっきより顔を赤くして聞いてくる

「えっ！…そのあの、えっと」

俺もどう答えていいかわからなかった

「レン…い、言わなくてもいいかな？」

「うん…俺も言わなくていい？」

「うん…」

「とりあえず…もう遅いから帰ろうか？」

そろそろミク姉が心配するし…」

そう言ってお互い真っ赤な顔をして歩き始めた

「レン…手繋いでもいい？」

公園を出て少し歩いたところでリンが言ってきた

「うん…いいよ」

そう言ってリンの右手を握った

「ありがとう…」

リンがボソツと言った

（…リンの反応で俺がどんな手紙を書いたか何となくわかった気がする

この予想が当たってたらめっちゃ恥ずかしい…）

（もし…私の予想が当たってたとしたら

私…凄い事言ってない？！

そう考えると何か…凄く恥ずかしいよお）

それから俺とリンは手紙を持って無言で家に帰った

散歩と手紙（後書き）

長い間読んでくれた方ありがとうございました！

秋くらいに書き始めてもう年の瀬ですよ！

どれだけ書くの遅いんでしょうか…

レンがリンに書いた手紙の内容は…

読んでくれた方のご想像にお任せします。

読んで下さり誠にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979o/>

鏡音の休日

2011年1月2日17時03分発行